

自 己 評 価 書

(令和7年度)

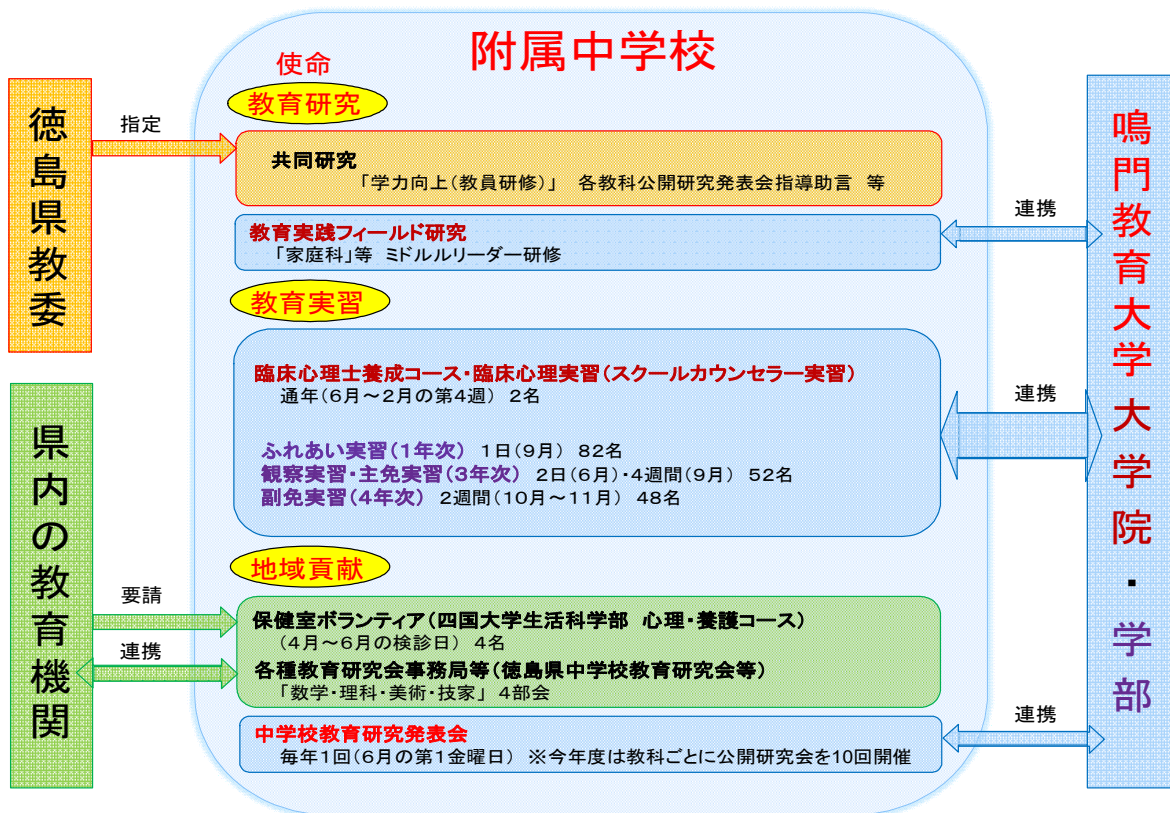
令和8年3月

鳴門教育大学附属中学校

目 次

I	学校の現況及び目標	1
II	重点目標に対する自己評価	2
1	いじめをなくし、豊かな心を育む学校生活の活性化	2
2	学びを豊かにする授業の創造	7
3	基本的生活習慣の徹底	11

本校の使命に関する取組状況



I 学校の現況及び目標

1 現況

- (1) 学校名 鳴門教育大学附属中学校
- (2) 所在地 徳島市中吉野町1丁目31番地
- (3) 学級等の構成
 - 1 学年 4 学級 2 学年 4 学級
 - 3 学年 4 学級 計12学級
- (4) 生徒数及び教員数(令和7年5月1日)
 - 生徒数 400 人 教員数 25人(正規教員)

2 目標

(1) 目的・使命

本校の目的は、附属中学校校則第1条において「小学校における教育の基礎の上に、心身の発達に応じて、義務教育として行われる普通教育を施すとともに、鳴門教育大学（以下「本学」という。）における生徒の教育に関する研究に協力し、かつ、本学の計画に従い学生の教育実習等の実施に当たることを目的とする」と定めており、本校は義務教育を行う任務とともに、教員養成大学の附属中学校として、次のような使命をもった学校である。

- ① 大学と一体となって、教育の理論及び実践に関する科学的研究を行う研究学校としての使命
- ② 鳴門教育大学の学部学生の実地教育（教育実習）及び大学院生との教育実践研究等を行う使命
- ③ 教育界の課題の解明に努め、関係機関と連携し、本県中学校教育推進に寄与する使命

(2) 教育目標

本校は、校則第1条に示されている中学校教育の目的の達成のため、次の教育目標を掲げ、めざす生徒像・教師像・学校像を明確に示している。

知・徳・体の調和的人格の完成をめざし、自主・自立の精神、創造的能力、豊かな人間性をそなえ、国際社会の発展に寄与することのできる心身ともにすこやかな中学生を育成する。

めざす生徒像

- 優しく思いやりの心を持ち、人の気持ちのわかる生徒
- 夢をかなえるための目標を持ち、自主的、創造的に学ぶ生徒
- 強い意思と体をもつと共にしなやかに生きる生徒

めざす教師像

- 生徒を愛し、生徒とともに伸びる教師
- ゆるぎない使命感、鋭い教育観をもった教師
- 優れた指導力をもった教師
- 強い責任感をもって、何事にも丁寧な対応ができる教師

めざす学校像（校訓）

- 創造的な知性を磨く学問学校
- 情熱的な意志を鍛える鍛錬学校
- 強健な身体を練る体育学校
- 敬和奉仕の精神に生きる人間学校

(3) 令和7年度重点目標（実践事項）

- ① いじめをなくし、豊かな心を育む学校生活の活性化
 - ア 互いに助け合い、共感し合いながら多様な価値を尊重できる仲間づくり
 - イ 差別を許さない、見逃さない姿勢と、仲間の心の痛みが分かり合える関係づくり
- ② 学びを豊かにする授業の創造
 - ア ICT と生成 AI を効果的に活用した、個別最適な学びの充実
 - イ 振り返りを通して、自己調整力を高める自立した学習者の育成
- ③ 基本的生活習慣の徹底
 - ア 自らすすんでできる、さわやかなあいさつ
 - イ 5分前行動を心がけ、時間いっぱい取り組むことができる清掃活動

(4) 令和7年度評価項目（評価指標）

- ① いじめをなくし、豊かな心を育む学校生活の活性化
 - ア 保護者対象アンケート（7月と2月に実施）
 - イ 教職員対象自己申告による目標管理（2月）
- ② 学びを豊かにする授業の創造
 - ア 保護者対象アンケート（7月と2月に実施）
 - イ 教職員対象自己申告による目標管理（2月）
- ③ 基本的生活習慣の徹底
 - ア 保護者対象アンケート（7月と2月に実施）
 - イ 教職員対象自己申告による目標管理（2月）

Ⅱ 重点目標に対する自己評価

重点目標 1 いじめをなくし、豊かな心を育む学校生活の活性化

いじめは、どこの学校にもあり得るという認識のもと、本校においてもその防止に向けて、早期発見と対応に向けて全校一丸となって取り組んできた。

本校では、年三回実施するいじめに関するアンケート調査等の結果を分析し、取組が適切に行われたか否かを検証し、期待するような改善が見られなかったような場合には、その原因を分析し、取組内容や取組方法の見直しを行ってきた。具体的には、「ささいな兆候であっても、いじめではないかとの疑いを持って、早い段階から複数の教職員で適切に関わり、いじめを隠したり、軽視したりすることなく、いじめを積極的に認知する」ことを徹底して行った。そして、毎月実施している「生徒指導委員会」において、各学年の状況を共有してきた。相談体制についても、週1回のスクールカウンセラーによる相談や、新入生全員への年度当初のカウンセリング、また生活記録の記述等も毎日、担任が丁寧に確認しており、その成果も見られた1年であった。

また、今年度は、徳島市・佐那河内村人権教育研究大会の第3ブロック（市内6中学校が所属）の会場校として、人権教育の公開授業があり、各学年とも同和教育を教材にして、授業を多くの先生方に参観してもらった。それに向けて、夏期休業中は、元隣保館のコミュニティセンターへ出向いて勉強会をしたり、愛媛県の人権センターで地域の歴史を伺ったりする等の研修を積んだ。教員も子供たちの実態に合わせて、教材研究を進め、このような取組を通して、反差別の気持ちとともに、仲間を思いやる気持ちも生徒の中に涵養されていったように感じている。教員自身も同和問題学習の研修を通して、自分を振り返り、多面的な視野で「温もりのある教育」というものを意識できるようになったと感じている。また、次の学習指導要領にむけて、さかんに言われるようになった「包摂する」という言い方を、全てのクラスの研究授業の指導案に入れることとし、教員の意識を高めるきっかけとした。研究会後に、近隣の中学校の多くの先生から、「子供たちの意見が、決してきれい事ではなく、自分ごととして捉えられていることに感心した」という感想が寄せられた。また、徳島市教委の人権教育担当からも、それまでの取組や本校教員の前向きな姿勢に、身に余る賞賛の言葉を頂けたことは、本校にとって大きな自信となった。今後も、いじめのない、安心・安全な学級作りを通して、子供も親も安心して通える附属中学校を目指していきたい。



(徳島市・佐那河内村 人権教育研究大会当日 (11月20日)の様子)





(新入生歓迎音楽会での1年生のクラス合唱)



(2,3年生代表のソングリーダーによる合唱)



(文化祭での3年生の演劇の様子)



(3年生による40年以上続くハレルヤ合唱)



(体育祭での長縄跳び)



(3年生の借り物競走)



(2年生の修学旅行：東京方面)



(1年生の宿泊活動：ハチ高原)

(2) 教職員対象自己申告による目標管理

ア 互いに助け合い、共感しながら多様な価値を尊重できる仲間づくり

当初申告	最終申告	評価
登校時や休み時間は、できるだけ学年のフロアで過ごし、できるだけ多くの生徒とコミュニケーションを取るようにする。	休み時間に多くの生徒と接することで、小さな変化にも気づきやすくなり、多面的な視点で子供を支えることができた。	A
生徒の言動の中に、独りよがりなところが見られないか注目し、互いを尊重できる仲間づくりができるように指導する。	授業中の発言などに、ふざけているつもりで、相手を傷つけている場面がよく見られたが、その頻度はある程度減ってきた。	B
他者を思いやる心を育てるために、道德での教材や学活での取組を効果的に生かし、子供の変容を支える。	他者の思いに共感しながら、心温まる言動が見られる生徒も増えたが、まだ、自分勝手な振る舞いが出てしまう生徒もいる。	B

イ 差別を許さない、見逃さない姿勢と、仲間の心の痛みが分かり合える関係づくり

当初申告	最終申告	評価
ブロック人権の大会に向けて、子供たちの反差別の強い心を育てる。	例年に比べて、教員が多くの研修を積むことができ、子供にも反映できた。	B
差別を許さない強い気持ちを持つよう、多様な学習教材を準備する。	差別の現実に学ぶ授業が多く設定できたことで、自分事と捉えられる者が増えた。	B
日頃の生活の中に潜んでいる差別心にはっきりと向き合わせ、思いを正していく。	研究大会を通して、自分たちの思いをしっかりと発表することができた。	A

3 評価項目の達成及び取組状況の自己評価

(1) 優れた点（成果）

- 休み時間や昼休みの廊下や教室の巡視をすることで、生徒は常に教師が見守ってくれているという安心感が持て、その結果、巡視中の教員に些細な悩みでも気軽に話しかけてくる生徒も多く、生徒と教師の関係性がよく、信頼関係も築けていた。
- 友達との関わり方に不安がある生徒も「折り合いをつける」という術を大切にする、という話を年度当初から全校に語ってきたので、適度な距離感で関わるできるようになってきた生徒も多い。生活記録のやりとりで、担任は、生徒の考えていることや現状を把握することがよくできた。生徒の表情や様子を捉えて学年団で共有し、スピード感のある対応ができていた。
- 生徒間のトラブルがあっても、丁寧に聞き取り、指導の理由を生徒・保護者に確認のうえ共通理解を図りながら進め、記録に残すもできた。
- 人権教育への取組が、研究大会を通して、例年以上に熱心に行うことが出来、内容の濃い研修も多数実施できた結果、生徒に反差別の意識と仲間を大切にする気持ちが顕著に育まれた。

(2) 改善を要する点（課題）

- 子供たちの多種多様な価値観を互いに認め合いながら、学級の一体感を保てるように各クラス担任は支援してきたが、休みがちな生徒が何人か出てきて、子供たちの声が細部まで十分に聞き取れていなかった、という反省もあった。
- 生徒とのコミュニケーションを積極的に図ろうとしたものの、業務に追われたり、電話対応等で、授業開始前や、昼休み等、限られた時間帯に全ての子供たちへ十分な声かけができていない場面もみられた。
- 差別を許さない強い気持ちをもって、授業に臨めた生徒が多かったが、自分事としてしっかりにとらえ、将来大人になってもこの気持ちを持続可能な思いへと繋げていくためには、日頃の生活を通して、常に強い人権意識が持てる生徒を更に育てていかなければならないことがよくわかったので、今後、しっかり実践していきたい。

以上の内容を総合し、4段階中の「 B 」と判断する。

自己評価の基準	A 十分達成されている
	B 達成されている
	C 取り組まれているが、成果が十分でない
	D 取り組みが不十分である

* 評価項目ごとの自己評価の基準は、以下同じ

重点目標 2 学びを豊かにする授業の創造

本年度は、昨年の「探究的な学習」に続いて、研究の方向を模索していたが、昨年は、従来の6月の研究発表大会と別に、12月にも模擬県議会における「STEAMIC教育」を全国に向けて公開したため、2度の研発（研究発表大会）を実施したので、今年は少しスタイルを変更し、1から理論を立ち上げる研究では無く、各教科における資質能力の育成に徹底的に取り組み、教科ごとの公開研究発表会という形を取ることにした。全10教科、10回の開催となることで不安もあったが、研究会を実施しても該当教科以外は、平常授業が行え、従来の研発のような大がかりな学校全体の時間変更や保護者の応援も依頼すること無く、スムーズに進めることができた。テーマとしては、令和3年に文科省から通知された、「令和の日本型教育」で示された「個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実」に関して、公表されてから4年も経つのに、まだまだ現場ではその十分な意味が浸透した実践が行われていないように思い、本校でも各教科でしっかりとその取組を見直し、授業を公開した。近隣の中学校の校長先生方からは、全教科を1日で開催していた従来の発表会では、参加したい教員が複数人いても学校の実情から、多くの教員を参加させ辛かったが、開催日が教科ごとに違くと参加しやすいと言われた。従って、1日（実際には半日）開催だった研発より、トータルの参加者数は、今回の方が50名以上多かった。これは、確かに開催日が教科ごとに違っていた影響もあると思うが、それ以上に、どこの学校でも当たり前に取り組んでいる、この学習スタイルが十分でなかったり、成果が上がっていない中で、本校の取組を参考してみたいと思っていただき、参加された教員も多かったことが当日のアンケートからもわかった。「これなら、自校でも取り組めると思ったので早速試してみたい」「個別最適な学びの場面と協働的な学びの場面が効果的に1時間の中で組み合わせられているのがわかり、大変参考になった」等の感想が多数寄せられた。ただ、本校としても、まだまだ発展途中であり、更に工夫することで一人一人、多様な生徒の学びを深め、包摂的な支援ができるのではないかと、ということもわかり、次年度への課題も見つかり、有意義な研究が進められた。そして「学びの豊かさ」については、年度当初、本年度のキーワードとして示した「豊かな心」と「豊かな学び」を常に意識した取組を行った。



(音楽の公開研究授業)



(家庭分野の公開研究授業)



(数学の公開研究授業)



(理科の公開研究授業)

(2) 教職員対象自己申告による目標管理

ア ICTと生成AIを効果的に活用した、個別最適な学びと協働的な学びの充実

当初申告	最終申告	評価
ICT を効果的に活用し、生徒の理解を助け、深い学びへと導けるようにする。	毎時間、教材提示でプロジェクタを利用し、視覚的にわかりやすい授業ができた。	A
生成 AI を答えを教えてくれるツールとしてではなく、自分の考えを多面的に捉えてアドバイスがもらえる仲間として活用する。	積極的に活用するまでは至らなかったが総合的な学習の時間には多くのアドバイスがもらえて、深く考えるきっかけとなった。	B
タブレットを利用して、他者の意見を常に参照できる環境にして、個別最適な学びを提供し、その後協働できるようにしたい。	タブレットを積極的に使い、メタ文字等の他者参照ソフトを利用し、多くの意見を参考にしながら個別最適な学びができた。	A

イ 振り返りを通して、自己調整力を高める自立した学習者の育成

当初申告	最終申告	評価
各单元ごとに振り返りをする中で、学習の定着度が確認でき、それを今後の学びへと自己調整をさせて自信をつけさせたい。	どの小单元でも振り返りをさせて、次時へ繋げたかったが、十分にその時間が取れなかったため、時間配分を工夫したい。	B
振り返りを通して、積極的に自己調整することで、次の個別最適な学習へとつなげられる、自立した学習者を育てたい。	振り返りは、しっかりできるものの、自己調整しながら、自分に最適な学習を模索するまでには至らない生徒が多かった。	C
自立した学習者として、授業に臨めるような、生徒の興味関心を高められる教材研究を十分に行う。	ICT を活用しながら、導入部では前向きに取り組む生徒も多かったが、もう少し深い学びにつながる教材研究が必要だった。	B

3 評価項目の達成及び取組状況の自己評価

(1) 優れた点 (成果)

- 自ら課題を選んだり、予想を立てたりしながら「自分事」として学びに向かう姿が増え、個別で試し、協働で共有し、再度個別で修正する「往還的な学び」が複数教科で確認された。
- 対話・相互コメント・教え合いなど、生徒同士の協働的な場面が自然に生まれることが多かった。そして、タブレットを始めとした、ITC が学びの質の向上につながったと実感できる場面が増えた。
- 振り返りが定着し、次にどうするかを自分で考える姿が多く見られるようになり、これは生徒の自己調整力が伸びた証であり、今回の大きな成果の一つである。このことが、これから「主体的・対話的で深い学び」の根幹となるであろうと思われる。
- 異なる学力の生徒が、それぞれのペースで学ぶ姿が多く見られるようになり、これはまさに「個別最適な学び」の姿であり、これを今後も続け、発展させていくことで、誰一人取り残さない学びへとつながっていくであろうことが実感できた。

(2) 改善を要する点（課題）

- 解決が十分に進んでいかない生徒への支援が十分でない場面も見られ、教科によってアプローチが違おうとしても、そういう生徒への支援を ICT をうまく活用して行えるように工夫が求められる。
- 「個別最適な学び」が進んだ一方で、学習の深まりを客観的に捉えて評価に繋げる方法に未整理の部分が残ったので、「指導と評価の一体化」をどう実現していくかが、今後の課題であることを認識した。
- ICT の活用は活発になったものの「どのツールで、何の学習を、どのように伸ばすか」という、学びの目的と手段の結びつきが十分でない場面も見られた。
- 協働的な場面を何度も設定すると、発展課題が扱えなくなるなど、授業展開の構造的課題の克服が必要であり、「協働的な学び」の中で、学びの質が十分担保できてない場面も見られた。

以上の内容を総合し、4段階中の「 B 」と判断する。

- | | |
|---------|----------------------|
| 自己評価の基準 | A 十分達成されている |
| | B 達成されている |
| | C 取り組まれているが、成果が十分でない |
| | D 取り組みが不十分である |

* 評価項目ごとの自己評価の基準は、以下同じ

重点目標 3 基本的な生活習慣の徹底

あいさつができる、人の話が聞ける、時間が守れる、忘れ物をしない、といった基本的な生活習慣がきちんとできることの重要性については、全校集会で生徒指導主事からも、そして各学年団でも日常的に伝えていることである。そのようなあたりまえのことをあたりまえにできる「凡事徹底」は、学校生活の基本であり、それができたうえでの学力向上である。

なかでも、あいさつは、朝はそれによって1日が気持ちよく始まるように習慣付け、校内でもすれ違う人と、自然でさわやかなあいさつが心がけられるように呼びかけたことで、校内でのあいさつは随分と充実してきた。

人の話をよく聞くことについては、授業中に限らず、様々な伝達や諸注意も同様のことで、その重要性をしっかりと担任から伝えている。今年、人権教育の研究大会が本校であったこともあり、研究授業での子供たちの聞く態度は参観者から好評価を得ることができた。

時間を守ることについては、朝の登校時はもちろん、授業においても5分前着席の徹底を呼びかけた。仲間同士で声をかけながら自分を律することは、今までにも言われ続けているであろうが、まだ十分でない者には、そのことの重要性を十分に理解させたい。

忘れ物をしないことについては、同じミスを繰り返さない方法を、自分なりに考え意識することで改善が見られるようになってきた。今後も「凡事徹底」の大切さをしっかりと伝えていきたい。



(毎朝の登校風景)



(朝のあいさつ運動の様子)



(早朝から運動場で体を動かす生徒の様子)



(ボランティア部の活動の様子)



(朝の読書の様子)



(佐々木委員長の生徒へのご講演の様子)

(2) 教職員対象自己申告による目標管理

ア 凡事徹底の上、より高い目標に向かって挑戦し続ける姿勢

当初申告	最終申告	評価
人の話を聞く態度、時間を守ることなど、基本的な生活を通して、日々の学校生活を有意義なものとする。	授業中の人の話を聞く態度は随分向上したが、学活等で担任からの連絡事項が十分に聞けていない生徒は、まだ多い。	B
当たり前の事を当たり前でできない者が、偉そうなことを言ってもクラスがまとまらないことを実感させたうえ、改善したい。	凡事徹底を合い言葉のように、日頃から語ることで、そういう生活習慣が身に付いている者が、リーダーとなっている。	A

イ 笑顔で、元気なあいさつを通して、学校生活を活性化させる

当初申告	最終申告	評価
さわやかなあいさつを通して、学校生活において、毎朝いいスタートが切れるように、お互いに元気にあいさつをして、共に頑張る仲間意識を育みたい。	朝のあいさつは、積極的にできるようになってきたものの、声が小さく恥ずかしがる生徒も少なからずいる。友達同士でのあいさつは元気にできていて雰囲気が良い。	A
本校への来校者や、廊下ですれ違う際にも元気にあいさつができるようしたい。校内に生徒の元気なあいさつの声が響くことで学校活性化のバロメータとしたい。	廊下で教員とすれ違う際のあいさつは、しっかりとできるようになり、これは本校にとっても今までで一番できているように思う。しかし、来校者にはもう一歩である。	B

3 評価項目の達成及び取組状況の自己評価

(1) 優れた点（成果）

- 時間の厳守や、人の話をよく聞く、忘れ物をしない、とい点においては、なぜそれが大切なのかをしっかりと理解させることで、概ね満足できるくらいになってきたので、これを継続して全校生徒が徹底できるように、習慣化させていきたい。
- 生徒会を中心とした毎朝のあいさつ運動は、雨の日も寒い日も年間を通して実践できていた。その効果もあり、自分から先にあいさつのできる生徒が多くなった。朝から爽やかなあいさつをすることで、1日のスタートが充実したものになることを実感する生徒も増えた。

(2) 改善を要する点（課題）

- 人の話を聞くことにおいても、概ねできてはいるが、授業中などにどうしても集中が続かなかったり、最後まで話を聞かずに、自分の思いをすぐに発する生徒も見受けられる。周りの雰囲気を十分に察知して、TPOに応じた態度を取るうえでも、人の話を聞くことの大切さを更に浸透させていきたい。
- あいさつは、朝や校内において本校の先生方には、よくできるようになってきたものの、来校者へのあいさつは、まだ十分でないように感じる。

以上の内容を総合し、4段階中の「 B 」と判断する。

- 自己評価の基準
- A 十分達成されている
 - B 達成されている
 - C 取り組まれているが、成果が十分でない
 - D 取り組みが不十分である

* 評価項目ごとの自己評価の基準は、以下同じ

Ⅲ 別添 自己評価根拠資料一覧

	観点番号	資料番号	資料名	備考
1	1・2・3	参考資料1	令和7年度学校評価アンケート結果 (保護者対象アンケート集計結果)	資料回収
2	1・2・3	参考資料2	教職員対象自己申告による目標管理自己 評価結果	資料回収
3	1	参考資料3	令和7年度全国学力・学習状況調査結果 (学力調査)	資料回収
4	2	参考資料4	令和7年度学校生活アンケート集計結果	資料回収
5	2・3	参考資料5	令和7年度全国学力・学習状況調査結果 (生徒質問紙)	資料回収